

教科：体育科

災害時要援護者疑似体験～視覚障害者バージョン～ 指導要綱

学習指導要領との結びつき：〔第5学年及び第6学年〕

目標の一つより抜粋

「協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、
自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる」

目教科書との結びつき：教科書 「新・みんなの保健5・6年」学研

目次より

心の健康（心の発達、不安やなやみをかかえたときなど）

病気の予防（病気の起こりかた、生活のしかたと病気など）

⇒健康の大切さ、病気の人の気持ちを考える

準備するもの

1クラス分

- アイマスク…最低 10 個
- 新聞紙…3 日分
- ひも…10 メートル
- テープ…適量
- パネル…4 枚(手引きや声掛けのポイントが書いてあるもの)
- 危険箇所パネル…数枚(火災発生、電線が倒れている、足場が悪い等)
- 入り口&出口パネル…各 1 枚
- ハサミ…1 つ

*パネル類は不要と判断した場合や、黒板を使用する場合は不要。

ねらい

この擬似体験ゲームは災害時に避難する際、生徒を災害時要援護者と呼ばれる一人では避難することが困難な人々の状態に近づけ、その体験を通して障害者への理解を深めると共に共助の精神を育むことを目的としています。

手順

1. グループ分け。

まずクラス内をざっくり 2 つに分ける。廊下側の人にアイマスクを渡し、静かに廊下に出してもらう。部屋に残った人は後でアイマスク組を介助する。

そして部屋に残った人と一緒にトラップを大急ぎで作る。

トラップとは??

机をバラバラに移動して、机や椅子の脚の間に適当に切ったひもを結ぶ。入り口と出口のドアには上からひもをたらしておく。

次に新聞紙をぐちゃぐちゃにして適当にばら撒く(新聞紙は瓦礫として適当においてもいいし、ガラスの破片として窓のそばにおいてもいい)。そして最後に危険箇所パネルを適当な箇所に貼り付ける。

2. ゲームの説明をする。

トラップができたら教室に残っている人には廊下に出ている人を介助することを伝える。介助の詳しい方法は伝えず、入り口から出口まで安全に誘導することだけを伝える。そして廊下に出たら適当にアイマスクをしている人とペアを作ってもらおう。

3. ゲーム開始

準備ができたならゲームを開始。順番に入口から出口まで誘導してもらう。あまりに危険な行為以外はできるだけ放置しておく。(うるさい場合はちょっとと注意する)

4. 中間説明をする。

全てのペアが終わったら一度全員を教室に戻しお説教タイムを始める。このとき教室の机や椅子はそのままにしておいて立ったまま話を聞いてもらう。(その時に話す内容の参考は、一番最後に掲載している。)

5. ペアをチェンジしてもう一度体験してもらう。

さっきアイマスクをした人が介助者に。介助者だった人は視覚障害者役となってもらう。このときに、説教の時に話したポイントの助言をしながら正しい手引きの方法を体験してもらう。

6. まとめ

ゲームを通して何を知ってもらいたかったのかを伝える。以下のようなことを目的としてこの教材を作成している。

この学習を通して子供たちに災害時の視覚障害者の体験をしてもらうわけですが、介助の仕事および体験の経験に終わるものだけではなく、最終的には日常生活での助け合いの精神を子供たちに持ってもらうことを目的に作成した学習教材です。ボランティア元年といわれた阪神淡路大震災以後、様々な団体による活動が行なわれています。しかしそういった活動に任せきるのではなく、自分の日頃の生活でボランティアを実践することが大切です。

ボランティアを行なう人は、全ての人最初からボランティアのリーダー的な力を持っているわけではありません。身近な所からの活動の経験が、基礎となります。災害が起こって、被災地へ行きたいという思いを持って何も知識をつけないで行くと、逆に迷惑になることもあります。身近な場所、地域などでの活動を通して、日頃から力を付けることによって災害時のボランティア力につながります。そのような、ちょっとしたボランティアやボランティアと思っていないことでも非日常時には大きな力となることを知ってもらい、地域に根付いた交流、活動を行なっていく若者が増えてほしいと私たちは考えています。

最初にも申し上げましたが、この教材の最大の目的は地域コミュニティでの交流の積極性や日頃から地域の人々とコミュニケーションをとることが大切だという事を伝え、それを実践するきっかけを作ることであり、それが防災への第一歩です。この教材をこれらの目的のために使用し、災害時要援護者への理解を少しでも深めることにつながれば幸いです。

お説教の内容例

- ① 感想を聞きます。「怖かった」「不安だった」などの答えが返ってきたら成功。視覚障害者はさっきの時間だけではなく今の状態がずっと続いているという事を伝える。
- ② 視覚障害者の人は災害時、一人だったら怖くて家の中から出られない。誰かの助けがないと、逃げようとしなれないという事も伝える。
- ③ 危険箇所パネルの存在も最初は気づかないか無視してしまいます。発見しても意味が分からないでしょう。このときに災害時は街中に危険がたくさんあることを伝えましょう。

声かけの心構え

- ① 大丈夫ですか？と声をかける…いきなり手をとって「さあ！行きましょう」といった感じでは視覚障害者はとても不安を感じてしまいます。必ず最初に声をかける必要があります。
- ② 周囲の状況を説明する…災害時に視覚障害者は普段ある程度歩きなれた街でもどのように変化しているかも全く分からず、とても不安に思っています。そして避難所ではやはり暮らしにくいので、できれば避難所にも行きたくないというのが本音です。周囲の状況を説明して避難所に行くことが必要であることを伝えます。
- ③ 名を名乗る…視覚障害者は相手の顔が見えず、知らない人に対しては不安を感じてしまいます。そのため自分はどのような人間であるかということをしつかりと伝えて、不安を和らげてあげることが重要です。
- ④ 避難するルートを説明する…視覚障害者の人は自分の生活圏内の事はある程度わかっています。そのため避難ルートのある程度説明することで、不安を少し解消することができます。ルートを変更せざるを得ない場合はその都度伝えます。
- ⑤ 答えを聞く…最後に一緒に避難するかを聞きます。あくまで避難するか否かは視覚障害者の方の自主性に任せます。(本当にすぐにでも避難しなければ生命が危ない場合などには、有無を言わず大人二人で両脇を抱え走って逃げます)
- ⑥ 不安を解消する…視覚障害者は目が見えないという不安の中で暮らしています。災害時の不安は私たちの想像をはるかに超えるものです。そのためできる限りの方法で不安を解消してあげましょう。今回の手順はその為のものです。
- ⑦ 日頃からの声かけとコミュニケーション…「普段していないことは災害時には絶対できない」これは防災においての原則の一つです。災害時要援護者への介助も同じで、普段から声をかけることに慣れていないと災害時には絶対声かけはできません。だから普段から家族や友達、近所の人々との挨拶や交流が大切になります。普段からいろんな人に挨拶ができるようになることが声かけの第一歩です。

手引きの心構え

- ① 特に段差に注意する…視覚障害者にとって段差はとても恐ろしいものです。階段の場合、下りは足を踏み外すと転がり落ちてしまい大怪我をする恐れがあり、とても慎重になります。小さな段差でも目が見えないと大きな下りの階段だと思ってしまい、足がすくんでしまいます。そのため段差の存在、その長さや大きさをしっかりと伝えます。
- ② 急がせない…視覚障害者の人は、普段と違う町を歩くのは恐怖心があります。その為怖くて余計に足が進みません。災害時に、介助側も気が焦るのは当たり前です。しかし、急に足が速くなったりするなら一声掛けることが大切です。「もう少し早く歩いても大丈夫ですか？」と声をかけてからペースを変えることを心がけます。
- ③ 「ここは平らです」など、時々声をかける…安心感を与えるために、時々声をかけることが大切です。危険箇所ばかりではなく、安心箇所も伝えることで手引きをスムーズに行なうことにつながります。
- ④ 下(足元)だけでなく上(頭上)にも注意する…足元に注意することはもちろん必要ですが、災害時には電信柱が倒れたり、看板が傾いたりして頭上にも注意が必要です。特に電線は首を引っ掛けたりして危険なので注意が必要です。
- ⑤ 通過しているところを伝える…「今〇〇の前を通過しています」などその時通過している地点が分かる目標を言う事で安心感を与えることができます。
- ⑥ 絶対に押さない！押すことは駄目！…手引きの方法で、絶対にしてはならないことは押して前に進むことです。押すという事は相手に恐怖と不安を激しく与えることとなります。押された相手は前に何も無いといわれても足でブレーキをかけて進むことを拒んでしまいます。おそらく1回目の実践では皆が押しながら進むと考えられます。(実際そうでした)なのでよく見ておきます。
- ⑦ 手引きの方法を実践する…最後にみんなの前で手引きの方法を実際に見せます。前を介助者が歩き腕を90度に曲げて固定し、目が見えない人に曲げた方の腕の肘をつかませます。介助者が前を歩くことにより、前は安全だと感じ取れると同時に、介助者が90度に曲げた腕の上下で階段を下りるときや上がる時の目安になります。このとき、曲げた腕は90度でしっかりと固定し、動かないようにします。
- ⑧ 危険箇所を回避する…今回教室内にトラップをいくつか仕掛けています。そのため生徒はわざわざトラップを頑張ってゴールを目指したり、トラップを安全に通ってみたいと思います。しかし本当に災害が起こった時、危ないところは誰も通れないし、通りません。だからわざわざトラップがある場所を頑張って出口(廊下)に出る必要はありません。それが一番安全な方法です。
- ⑨ 声かけの重要性を確認する…何度も言うようですが、声掛けはとても大切です。視覚障害者の人は目が見えないので他人の言葉から情報を得てその人を自分の中で信用できるかどうかを判断しますので手引きの時には常に声をかけて安心感を与えてあげましょう。

体育と防災

災害時用援護者疑似体験～視覚障害者バージョン～



今この教室の中を、災害が発生したまちだと想定して視覚障害者と介助者のペアになって歩いています。みんな気をつけて!!!(教室にはいたるところに瓦礫や破片に見立てた新聞紙が散乱し、電線の代わりにのロープが張り巡らされています)

声かけの心構えを思い出して、まずは名前を名乗ってから周囲の状況や避難ルートの説明をしてね。

頑張ります!!!





実際体験してみて、視覚障害者の人がどれだけ怖いかを実感できたと思うけど、今日は「怖い」っていうのを体験してもらいたかったんじゃないんだ！
皆に、これから街中で困った人を見つけたら声をかけられるような人になってもらいたいと思って体験してもらいました。これからは、まず家族や地域の人との挨拶から始めてみよう！普段からの声掛けが大切なんだよ★

この災害時要援護者対策の体験を通して、たくさんの事を学ぶことができます。視覚障害者の方の気持ちだけでなく、手引きをする側に立つときに必要な知識、そして社会の中で人と人のつながりを大切に、ボランティアを行なう人は全ての人が最初からボランティアのリーダー的な力を持っているわけではなく、身近な場所、地域などでの活動を通して、日頃から力を付けることによって災害時のボランティア力につながります。そのようなちょっとしたボランティアやボランティアとっていないことでも非常時には大きな力となることを知ってもらい、地域に根付いた交流、活動を行なっていく若者が増えてほしいと私たちは考えています。

最初に申し上げましたが、この教材の最大の目的は地域コミュニティでの交流の積極性や日頃から地域の人々とコミュニケーションをとることが大切だということを伝え、それを実践するきっかけを作ることであり、それが防災への第一歩です。